

「私たちのちかい」を通して

阿弥陀さまの願いを 私が生きる上での課題に

本当は不思議としかいいようのない、私のいのちさえ「当たり前」だと思ひ込み、私の思い通りにならないときには愚痴を言い、他者を攻撃してしまふ。そのような「私」に与えられている私が、「私」へのとらわれを超えて、すべてのいのちが等しく、尊く救われるべきのちであると感じることが出来るのは、そのように願いはたらき続けてきたとていつの阿弥陀仏の願いに出遇うからだといえます。

このことを親鸞聖人は『高僧和讃』に、

願作仏の心はこれ

度衆生のころなり

度衆生の心はこれ

利他真実の信心なり

(註釈版聖典88)

とご教示くださっています。これは、阿弥陀仏の「すべてのいのちを救いたい」という願い(利他真実の信心)が私たちに与えられるということ、私が仏になりたいと願う心(願作仏心)と同時に、「すべてのいのちを救いたい」と願う心(度衆生心)が与えられていることだということです。

平日頃から、自分の価値観を疑わず自己中心的でしかない私たちが、他の存在を救う仏になりたいと願うこと自体、本当は起こりえないことです。しかし、「すべてのいのちを救いたい」という阿弥陀仏

仏法に 当たり前が不思議で貴重な時間に

一、生かされていることに気づき
日々に精一杯つとめます
人びとの救いに尽くす仏さまのように

私が勤める筑紫女学園大学では、1年生のときに「仏教学」、2年生のときに「親鸞・人と思想」という科目が、卒業のために必ず受講しなければならぬ必修科目として設定されています。それは、学生たちに建学の精神である仏教・浄土真宗の教えをもとに、多様な価値観を知ること、他者の痛みに共感する思考を身につけてもらった上で、それぞれの専門分野での学びを重ねていただきたいという願いがあるからです。

入学したての学生の中には、仏教の教えに初めて触れる、興味が無い、あやしいと感じている方も多いのですが、そのような学生に対して私は、毎年決まって「皆さんの中で、自分の誕生日や生まれた場所などを自分で決めて生まれきたという方はいら

っしゃいますか?」と質問することから講義をはじめます。すると、仏教を自分とは関係がないものと見ていた学生たちが、自分自身のことを考えるという作業をはじめてくれます。そして、自分のいのちの誕生に関して、自分の意志が全く加わっておらず、さまざまながりの中で与えられたとしか言いようのないものだと思ひつき、当たり前だと思っていたいのちの不思議さにハッと驚いてくれます。

学生たちとこうしてやり取りを毎週繰り返していくうちに、最初はあやしいとすら感じていた「仏教の時間」が、多くの仲間によって支え・支えられ合っている不思議で尊い発見のある時間へと変わっていく一方で、1年間の講義が終わるときに「これから生きるうえで大切なことに気づけた時間でした」と言ってもらえることもあります。学生さんが仏法に出遇うことで、価値観が豊かになったよろこびが伝わってくる、何ともありがたい言葉です。

こうした話は、何も学生たちだけにいえることではないと思います。私たちは、日常生活を送る中で自分の価値観を疑わないことで、一つひとつの出来事の不思議さや尊さに気づけず、当たり前だと受けとめ、漫然と過ごしてしまっていることが多いのではないのでしょうか。

仏の願いを自らの願いとして生きていきたいと 心がける存在へとお育ていただく

私たちのちかい

ご門主が2016年の伝灯奉告法要初日に、私たち念仏者が現実世界でどのように生きていくべきかを示された「念仏者の生き方」。その肝要を2018年に4カ条にまとめられたのが、「私たちのちかい」です(別掲)。そこで「私たちのちかい」

- 一、自分の殻に閉じこもることなく
穏やかな顔と優しい言葉を大切にします
微笑み語りかける仏さまのように
- 一、むさぼり、いかり、おろかさには流されず
しなやかな心と振る舞いを心がけます
心安らかな仏さまのように
- 一、自分だけを大事にすることなく
人と喜びや悲しみを分かち合います
慈悲に満ちみちた仏さまのように
- 一、生かされていることに気づき
日々に精一杯つとめます
人びとの救いに尽くす仏さまのように

の願い＝本願に出遇えば、おのずと仏の願いを自らの願いとして生きていきたいと心がける存在へと育てられるということ、このご和讃から学ぶことができます。

そういった意味では、浄土真宗とは阿弥陀仏の願いを、私の願い、もしくは私が生きるうえでの課題とした生き方を始める人間へと育てられる宗教と言えらるかもしれません。

ある時、大学主催のボランティアに参加していた学生に「どうしてボランティアに参加してくれたの?」と尋ねたことがあります。すると学生が「仏教の時間に聞いた仏さまの願いは、自分たちが目指すべき大事な願いだなと感じて、私も何かお手伝いをさせてもらいたいと思ひました。支え合っているお互いだから、助け合うことが大事なんです。おねえ」と返答してくれました。

その学生は仏教の教えを自分のこととして考えたことで、自らのいのちを支える大きなつなかりに気づかれたようです。そのうえで、仏さまの「すべてのいのちを救いたい」という願いを自分の願いとして受けとめ、行動していったらいいと思います。多々のいのちを生かされていること、そのいのちを知らず知らずのうちに生かされていること、仏さまのいのちを知らず知らずのうちに生かされていること、第4条を実践し

ていらっしゃるのです。

当然、私たちが仏さまと同じように人を救うことはできません。しかし、仏さまから与えられた「すべてのいのちを救いたい」という心を、なるべく大切に温めながら日々を過ごすことはできるはず。私は学生さんの姿から、完璧なものではなくても、少しでも「人びとの救いに尽くす仏さまのように」生きたいと願うようになることが、念仏者の生き方なのだと、このことを教えていただいた気がしました。

ともすると、阿弥陀仏の教えに甘え、念仏者としての務めすら果たそうとしないのが私の姿です。「私たちのちかい」ではそのような私自身が、阿弥陀仏の願いを私のちかいとしながら日々の生活を精一杯つとめていくことで、仏さまの願いをよろこぶ一人となることの大切さをお示しくださっているのです。



宇治 和貴
筑紫女学園大学准教授